『入門 機械学習による異常検知 — R による実践ガイド — 』(コロナ社、2015) 初版第1刷の正誤表

Tsuyoshi Idé (井手 剛) goodidea@jp.ibm.com

平成 27 年 10 月 24 日

### 1

#### 異常検知の基本的な考え方

#### • p.11

- 誤: 例えば、「>」の右に、 $56*\log(10^{\circ}(-20))$  と打つと、 $50\ln 10^{20}$  の答えが出てきます。
- 正: 例えば、「>」の右に、 $56*\log(10^{\circ}(-20))$  と打つと、 $56\ln 10^{-20}$  の答えが出てきます。

## 正規分布に従うデータからの異常検知

p.28, 式 (2.17)。

- 誤: 
$$0 = \frac{\partial L}{\partial \mu} = -\frac{1}{2\sigma^2} \sum_{n=1}^{N} (\mu - x^{(n)})$$

$$- \quad \mathbb{E} \colon 0 = \frac{\partial L}{\partial \mu} = -\frac{1}{\sigma^2} \sum_{n=1}^{N} (\mu - x^{(n)})$$

p.56, 式 (2.57)

- 誤 
$$\mathcal{S}(t \mid N-1,0) = \frac{\Gamma[(m+1)/2]}{\Gamma(m/2)} \sqrt{\frac{1}{\pi m}} \left[ 1 + \frac{t^2}{m} \right]^{-(m+1)/2}$$
- 正  $\mathcal{S}(t \mid m,0) = \frac{\Gamma[(m+1)/2]}{\Gamma(m/2)} \sqrt{\frac{1}{\pi m}} \left[ 1 + \frac{t^2}{m} \right]^{-(m+1)/2}$ 

$$- \quad \mathbb{E} \, \mathcal{S}(t \mid m, 0) = \frac{\Gamma[(m+1)/2]}{\Gamma(m/2)} \sqrt{\frac{1}{\pi m}} \left[ 1 + \frac{t^2}{m} \right]^{-(m+1)/2}$$

- - 誤: 各変数が統計的に独立なとき
  - 正: 各変数が統計的に無相関であるとき

#### 非正規データからの異常検知

- p.71、上から3行目(森川浩司様のご指摘に感謝いたします)。
  - 誤:標準偏差 sig0=3 の正規分布
  - 正:標準偏差 sig1=3 の正規分布
- p.83、実行例 3.6 のすぐ上(森川浩司様のご指摘に感謝いたします)。
  - 誤: 評価します (実行例 3.6)。
  - 正: 評価します。次の実行例 3.6 は、標本数を n, カーネル行列をKとして格納した前提の計算例です。
- p.92、実行例 3.8、1 行目(山下智輝様のご指摘に感謝いたします)。
  - 誤: \$ 混合比を取り出す
  - 正: # 混合比を取り出す

4

#### 性能評価の方法

- p.112、上から3行目(佐々木俊久様のご指摘に感謝いたします)。
  - 誤: ソートされた異常度 anomaly\_sorted の関数として
  - 正: ソートされた異常度 score\_sorted の関数として

# 不要な次元を含むデータからの異常検知

• p.126 最初の式。森川浩司様のご指摘に感謝いたします。

- 誤: 
$$\frac{1}{N}\sum_{i=1}^N \boldsymbol{u}^{\top}\boldsymbol{x}^{(n)} = \frac{1}{N}\boldsymbol{u}^{\top}\sum_{n=1}^N \boldsymbol{x}^{(n)} = \frac{1}{N}\boldsymbol{u}^{\top}\hat{\boldsymbol{\mu}}$$

- 
$$\mathbb{E}$$
:  $\frac{1}{N} \sum_{n=1}^{N} \boldsymbol{u}^{\top} \boldsymbol{x}^{(n)} = \frac{1}{N} \boldsymbol{u}^{\top} \sum_{n=1}^{N} \boldsymbol{x}^{(n)} = \boldsymbol{u}^{\top} \hat{\boldsymbol{\mu}}$ 

- p.130、式 (5.18) の 2 行下。森川浩司様のご指摘に感謝いたします。
  - 誤: 正規直交ベクトルをr-M本加えて
  - 正: 正規直交ベクトルを M-r 本加えて
- p.132、下から3行目。森川浩司様のご指摘に感謝いたします。
  - 誤: M 次元空間の正規直交基底 r 個が
  - 正: M 次元空間の正規直交基底 m 個が
- p.144、式 (5.47) の 3 行目。森川浩司様のご指摘に感謝いたします。

- 誤: 
$$-\frac{M}{2}\ln(2\pi\sigma^2) + 定数$$

$$-$$
 正:  $-\frac{\overline{M}N}{2}\ln(2\pi\sigma^2)+$ 定数

• p.144、式 (5.49)。那須翔太様のご指摘に感謝いたします。

- 課: 
$$\langle \boldsymbol{z}^{(n)} \boldsymbol{z}^{(n)}^{\top} \rangle = \sigma^2 \mathsf{M'}^{-1} + \langle \boldsymbol{z}^{(n)} \rangle \langle \boldsymbol{z}^{(n)} \rangle^{\top}$$

- 
$$\mathbb{E}: \langle \boldsymbol{z}^{(n)} \boldsymbol{z}^{(n)}^{\top} \rangle = \sigma^{2'} \mathsf{M'}^{-1} + \langle \boldsymbol{z}^{(n)} \rangle \langle \boldsymbol{z}^{(n)} \rangle^{\top}$$

- 章末問題の【5】での表現がやや不正確でした。
  - 誤: どの要素もゼロではない任意の M 次元単位ベクトル z に対して、実対称行列 A を使い
  - 正:実対称行列 A が重複のない最大固有値を持つとし、対応する固

#### 5. 不要な次元を含むデータからの異常検知

6

有ベクトルを  $m{u}_1$  とします。 $m{u}_1^{ op}m{z} 
eq 0$  を満たす任意の M 次元単位ベクトル  $m{z}$  を考え

## 入力と出力があるデータからの異常検知

• p.168、最初の式。森川浩司様のご指摘に感謝いたします。

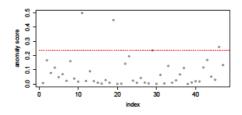
- 誤: 
$$[\cdots]^{-1} = \mathsf{A}^{-1} + \mathsf{A}^{-1} \tilde{x}^{(n)} [1 - \tilde{x}^{(n)\top} \mathsf{A} \tilde{x}^{(n)}] \tilde{x}^{(n)\top} \mathsf{A}^{-1}$$

$$- \quad \text{IE: } [\cdots]^{-1} = \mathsf{A}^{-1} + \mathsf{A}^{-1} \tilde{x}^{(n)} [1 - \tilde{x}^{(n)\top} \mathsf{A}^{-1} \tilde{x}^{(n)}]^{-1} \tilde{x}^{(n)\top} \mathsf{A}^{-1}$$

• p.168、式 (6.23)。

$$- \quad \mathbb{E}: \ e(\lambda) = \frac{1}{N} \sum_{n=1}^{N} \frac{1}{(1 - \mathsf{H}_{n,n})^2} \left[ \tilde{y}^{(n)} - \tilde{x}^{(n)\top} \hat{\alpha}_{\mathrm{ridge}} \right]^2$$

p.172、図 6.3 (b)。これは出版社との連携ミスで、別の図が使われてしまったようです。原図は下記です。森川浩司様のご指摘に感謝いたします。



- p.172、実行例 6.2。5 行目。異常度の計算にミスがありました。佐々木 俊久様のご指摘に感謝いたします。
  - 誤: a <- (as.numeric(ypred) y)^2/((1 TrHN)\*sig2)
  - 正: a <- (as.numeric(ypred) y)^2/((1 TrHN)^2\*sig2)
- p.174、真ん中の式の上。那須翔太様のご指摘に感謝いたします。

- 誤: 生のxを扱う代わりに、個の正規直交基底
- 正: 生のxを扱う代わりに、m個の正規直交基底
- p.176、下から5行目。那須翔太様のご指摘に感謝いたします。
  - 誤: 基底  $\boldsymbol{p}$  を  $[c_1,\ldots,c_M]^{\mathsf{T}}$  のように求めます。
  - 正: 基底  $\mathbf{p}_1$  を  $[c_1, \ldots, c_M]^{\mathsf{T}}$  のように求めます。
- p.184、上から8行目。大堀龍一様のご指摘に感謝いたします。
  - 誤: そのようにして特異ベクトルを  $(\tilde{\alpha}^1, \tilde{\beta}^1), (\tilde{\alpha}^2 \tilde{\beta}^2), \dots$  のように求めたとしましょう。
  - 正: そのようにして特異ベクトルを  $(\tilde{\alpha}^1, \tilde{\beta}^1), (\tilde{\alpha}^2, \tilde{\beta}^2), \dots$  のように求めたとしましょう。
- p.189、3番目の式。森川浩司様のご指摘に感謝いたします。

$$- \quad 誤: \left(\sigma^2 \mathbf{I}_N + \frac{\sigma^2}{\hat{\lambda}} \mathbf{\Phi}^\top \mathbf{\Phi}\right)^{-1} = \frac{1}{\sigma^2} \left(\mathbf{I}_{M_\phi} - \mathbf{\Phi}^\top \mathbf{A}^{-1} \mathbf{\Phi}\right)$$

$$- \quad \mathbb{E} \colon \left( \sigma^2 \mathbf{I}_N + \frac{\sigma^2}{\hat{\lambda}} \mathbf{\Phi}^\top \mathbf{\Phi} \right)^{-1} = \frac{1}{\sigma^2} \left( \mathbf{I}_N - \mathbf{\Phi}^\top \mathbf{A}^{-1} \mathbf{\Phi} \right)$$

• p.189、式 (6.66) の 2 行目。森川浩司様のご指摘に感謝いたします。

$$- \quad 誤: \, -\frac{1}{2\sigma^2} \boldsymbol{y}_N^\top \left( \mathsf{I}_{M_\phi} - \boldsymbol{\Phi}^\top \mathsf{A}^{-1} \boldsymbol{\Phi} \right) \boldsymbol{y}_N$$

$$\mathbb{E}$$
:  $-\frac{1}{2\sigma^2} \boldsymbol{y}_N^{ op} \left( \mathsf{I}_N - \mathsf{\Phi}^{ op} \mathsf{A}^{-1} \mathsf{\Phi} \right) \boldsymbol{y}_N$ 

#### 時系列データの異常検知

- p.198 実行例 7.1 の 2 行目。森川浩司様のご指摘に感謝いたします。
  - 誤:

- 正:

- p.205 式 (7.10)。大堀龍一様のご指摘に感謝いたします。
  - 誤:  $\xi^{(t)} \approx \alpha_1 \xi^{(t-1)} + \alpha_2 \xi^{(t-2)} + \dots + \alpha_r \xi^{(t-r)}$

- 
$$\mathbb{E}$$
:  $\xi^{(t)} \approx \alpha_1 \xi^{(t-r)} + \alpha_2 \xi^{(t-r+1)} + \dots + \alpha_{r-1} \xi^{(t-2)} + \alpha_r \xi^{(t-1)}$ 

- p.207 式 (7.15)。大堀龍一様のご指摘に感謝いたします。
  - 誤:  $\boldsymbol{\xi}^{(t)} \approx A_1 \boldsymbol{\xi}^{(t-1)} + A_2 \boldsymbol{\xi}^{(t-2)} + \cdots + A_r \boldsymbol{\xi}^{(t-r)}$
  - $\mathbb{E}$ :  $\boldsymbol{\xi}^{(t)} \approx \mathsf{A}_1 \boldsymbol{\xi}^{(t-r)} + \mathsf{A}_2 \boldsymbol{\xi}^{(t-r+1)} + \dots + \mathsf{A}_{r-1} \boldsymbol{\xi}^{(t-2)} + \mathsf{A}_r \boldsymbol{\xi}^{(t-1)}$

# **8** よくある悩みとその対処法

現時点で判明している誤りはありません。

#### 付 録

- 定理 A.6 の式 (A.38) の右辺で余計な負号がひとつありました。何度も 使う公式なので罪は重いです。申し訳ありません...。
  - 誤:

$$\int_{-\infty}^{+\infty} \mathrm{d}x \, \exp(-ax^2 + bx + c) = \sqrt{\frac{\pi}{a}} \exp\left(-\frac{b^2}{4a} + c\right)$$

- 正:

$$\int_{-\infty}^{+\infty} \mathrm{d}x \, \exp(-ax^2 + bx + c) = \sqrt{\frac{\pi}{a}} \exp\left(\frac{b^2}{4a} + c\right)$$

- p.258、下から2番目の式。森川浩司様のご指摘に感謝いたします。
  - 誤:  $\Lambda_{aa}^{-1} = \Sigma_{aa} \Sigma_{ab} \Sigma_{bb}^{-1} \Sigma_{ba}$  および  $\Lambda_{aa}^{-1} \Lambda_{ab} = -\Sigma_{ab}^{-1} \Sigma_{bb}$
  - 正:  $\Lambda_{aa}^{-1} = \Sigma_{aa} \Sigma_{ab}\Sigma_{bb}^{-1}\Sigma_{ba}$  および  $\Lambda_{aa}^{-1}\Lambda_{ab} = -\Sigma_{ab}\Sigma_{bb}^{-1}$
- p.259、定理 A.9。森川浩司様のご指摘に感謝いたします。
  - 誤:  $p(x \mid x)$  および p(y) は次で与えられる。
  - 正:  $p(\boldsymbol{x} \mid \boldsymbol{y})$  および  $p(\boldsymbol{y})$  は次で与えられる。
- p.264、(A.65) と (A.66) の間の式。別に間違いではないのですが、こっ ちの方がわかりやすいかと思うので書き換えます。
  - 古:

$$f(x + \epsilon) \simeq f(x) + \epsilon^{\top} \nabla f(x)$$
 すなわち  $f(x) + \epsilon^{\top} \frac{\partial f(x)}{\partial x}$ 

- 新(当初 ∇ が抜けていたのを 2015/05/06 に修正):

$$f(x+\epsilon) \simeq f(x) + \epsilon^{\top} \nabla f(x)$$
 および  $g(x+\epsilon) \simeq g(x) + \epsilon^{\top} \nabla g(x)$ 

• p.265、下から 4 行目。g(x) = c の形の制約についての記述が乱暴でしたので修正いたします。森川浩司様のご指摘に感謝いたします。

#### 12 \_ 8. よくある悩みとその対処法

- 誤:  $g(\mathbf{x}) = c$  という制約を加えても、同様に定理が成立することは明らかです。
- 正:  $g(\mathbf{x}) = c$  という制約を加えても、式 (A.68) が成立すること は明らかです。

#### 索引

- 非正値二次形式の訳語に誤りがありました。なお、negative semidefinite quadratic form という言い方もあります。
  - 誤: non-positive quadrature
  - 正: non-positive quadratic form